

はじめに

本稿は、2016年度 中京大学 現代社会学部 成元哲ゼミナールの社会調査実習報告書である。報告書のテーマは、愛知県子ども食堂の現状と課題である。

周知のように、日本国内ではバブルが崩壊した1990年代後半以降、非正規雇用の増大とともに、社会的格差、下層老人、子どもの貧困、社会的孤立などが社会問題として注目されるようになり、こうした問題への市民の自発的なリアクションの一つとして、2012年から子ども食堂が誕生した。愛知県内のいくつもの子ども食堂を訪ねて驚いたのは、並ぶおかずも食べ方も食堂の広さも、みんな違うということである。だが、同じものが見えてきた。それは、「子どもの貧困」を前に、「何かしなければ」という市民の思いがつくっている場だということである。「子どもの貧困」は「本人の努力が足りないからだ」という自己責任論から免れている。それは、「親の貧困」、「地域の貧困」が別の形で表面化したものに他ならない。また、教育機関や行政機関などの予算や意欲の「貧困」も関わってくる。そうである以上、子ども食堂は食事を出しておしまいではない。ここを起点に地元の人たちが子ども達のよりよい暮らしを目指していくそんな場を見すえた次のステージを追いかけていくものであるということである。愛知県は他の都道府県に比べて、市民活動が極めて脆弱であるが¹、遅まきながら、2016年度だけで約30ヶ所の子ども食堂が誕生し、その勢いはとどまらない。この報告書は、舌足らずの部分や考察が足りないところがたくさんある。だが、県内の約30ヶ所の子ども食堂に延べ50回ほど、学生が直接ボランティアとして参加し、お手伝いをしながら記録したものである。これにより、各地の子ども食堂の、それぞれの思いのこもった「試行」を記録しようとしたものである。第1部は、総論として愛知県子ども食堂の現状と課題をまとめている。第2部は、愛知県内の子ども食堂へのボランティア活動を通じて、その時々の子どものエピソードを記録したものである。

2017年4月27日

成 元哲